

神戸文化ホール

公益財団法人神戸市民文化振興財団

事業部営業企画課

坂本 京子

アートや劇場の仕事に関わって 6 年、ある程度はルーティンに事業をおこなえるようになりましたが、自分の力量を高めるには、日頃なんとなく物足りなさがありました。限られた組織の中で、与えられた仕事をこなしているだけでは、手法や発想、視点が限られてしまい、行き詰まりを感じていました。事業を捌いていくことも筋トレの必須メニューのように、対応力や現場力をつけるためには必要なのですが、そればかりだとやり甲斐がなく、アートマネジメントという概念とはかけ離れた仕事のように思うときがありました。

一方で、アートマネジメントの仕事の可能性や楽しさを伝えるための知識と言葉が私にあれば、職場をもっとよくできるのではないかという、勝手な使命感がありました。アートとはなにかを議論できるような闊達な職場に変えたいという思いが、学ぼうちにどんどん強くなり、これも今回のプログラムの効果のひとつかもしれません。プログラムを通して、アートにおける私自身の使命を今後、どこに置いていくべきか、どこに行き、どんな人に出会いに行けば、発想が拡張されていくのか、ヒントを多くいただきました。大学の授業そのものが久しく、学ぶという行為自体に改めて心を動かされたことが、一番の学びかもしれません。まだまだ学び足りないという気持ちでいっぱいですが、今後も意欲的に問いかけを続けていこうと思います。

コロナ禍において、文化芸術分野が大きなダメージを受け、アーティストや文化施設の多くが自粛を余儀なくされました。私の働いているホールでも、緊急事態宣言中に自主企画の在り方を問う場面が多くあり、今までになく自発的な発想と未来を想像する力が求められました。しかしながら、絶体絶命のシーンにこそ挽回のチャンスがあると感じたのも事実です。多くの事業がスクラップされましたが、一方で新しい文化芸術にチャレンジする機会がありました。思いが叶わず実現しないこともありましたが、既成概念に疑問を抱き、挑戦していくということは、社会を前向きに捉え、良い方向に進めていくことに寄与するように思います。人間社会を様々な分野から多角的に考えアクセスできる文化芸術の力には潜在性を感じています。コロナが歴史に刻まれるまで、まだまだ時間がかかりそうですが、文化芸術はコロナ禍の時代で、ところどころに錨を下ろす役割を担うのではないのでしょうか。なかなか思うように前に進むことはできませんが、焦らず気長に何度でも錨を下ろし、立ち止まり、景色を見渡しながら導きを探すが、今の混沌とした時代には必要ではないかと思えます。



図1 緊急事態宣言解除後の最初の自主企画 「HALL de PIANO」
神戸文化ホールの中ホールをひとり占めして、本番演奏会さながらの本格ステージでピアノ練習。
神戸文化ホール 中ホール (2020年)



図2 コロナウイルス感染拡大防止に取り組む全ての人を
文化の力で応援する生誕250年ベートーヴェン名言ポスター
神戸文化ホール (2020年)



図3 「苦悩を突き抜ければ、歓喜に至る」

コロナウイルス感染拡大防止に取り組む全ての人を
文化の力で応援する生誕250年ベートーヴェン名言懸垂幕
神戸文化ホール（2020年）